



第37回 タケノコと高齢化に想う

▼高齢化が進むということ

私は鳥取県米子市の大学で仕事をしているが、地域医療という仕事の関係上、鳥取県西部の中山間地に出かける機会が多い。全国と同じく鳥取県郡部も高齢化が進んでいる。郡部の病院では、医師不足だけでなく看護師不足、薬剤師不足が深刻な問題となっている。医師は、大学病院や自治医大などで何とかカバーできても、看護や介護などのスタッフがないければ、医療機能を果たすことができない。さらに、高齢化が進むということは、認知症や複数の疾患をあわせもつ患者が増えること、独居や2人暮らしなどの高齢者世帯が増え、コミュニティとしての機能が維持できなくなる恐れもある。運転免許更新の際、認知症の基準が厳しくなり免許返納のケースも増えている。しかし、そうなると病院までの交通手段がなくなってしまう。車がないと医療へのアクセスだけでなく、生活に必要な買い物や移動が制限される。

▼タケノコを掘りつつ

私の実家はもともと農家だったので、裏には竹林があり5月となればタケノコが生えてくる。息子たちが小さいころは、実家に戻り一緒にタケノコ掘りをするのが楽しみだった。皮をむき、米のとぎ汁でアクを抜き、醤油砂糖で煮つける。山椒の葉を散らして食べるタケノコの煮つけは最高の匂の味だ。「筍のひかり放ってむかれたり」(渡辺水巴)嵐山光三郎の素人包丁記には、縁の下から伸びてきたタケノコに穴をあけ、醤油と酒をつめて落ち葉で蒸し焼きにする話がてくる、うまそうなので一度やってみたいものだと思う。

ところで、息子たちも自立して鳥取を離れ、タケノコ掘りに行かなくなると、大きな問題がでてきた。放置されたタケノコたちは、当然ながら立派に成長して孟宗竹となる。その結果、まるで家の裏から竹藪が攻めてくるような勢いである。よく考えてみると、昔は竹が生活の中でさまざまな局面に利用されていた。タケノコの季節にはタケノコの煮つけ、成長した竹はお盆彼岸の花立て、垣根柵の材料、稻穂を乾燥させる稻木の木組み、冬の燃料などなど。生活と密着した竹の利用がなくなれば、竹林を管理する必要がなくなり、竹藪も荒廃していく。

これは里山全体にいえることかもしれない。究極のエコ生活であった農村では、里山の恵みをうまく利用してきた。食べ物としての山菜や動物、燃料としての薪炭、肥料としての落ち葉。しかし、化学肥料や農薬の発達で里山の役割は乏しくなり、若い世代が外に出ていくにつれ、里山は荒れていく。竹林も同じで「竹害」という言葉すら生まれている。

▼ふるさとを守るためにできること

若い世代が田舎から離れていくことは、里山や竹林が荒れることにつながる。何かよい方策はないものだろうか。タケノコは市場ではかなり高い値段がついているようだ。それなら、欲しい人はどんどん採ってくれたらいいのにと思う。もちろん泥棒は困るが、きちんとしたシステムを整えれば、需要供給の関係を回すことはできないものだろうか。鳥取県智頭町では「森のようちえん」が有名だ。あんなふうに、里山が子供たちの教育場所として役立つなら、こんなにうれしいことはない。すこし世代をこえて知恵をしぼってみる必要があるのではないか。久しぶりに実家でタケノコを掘りつつ、そんなことを考えていた。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)